

どろろがちがうのの？

里山住宅博街区を歩く

里山住宅博は、木の家をつくる工務店だけの期間限定モデルハウスです。では、実際に住宅総合展示場や、私たちの周りでよく見かける分譲地の住宅とは、どこが違うのでしょうか。今回は一般来場者に近い目線で、改めて現地を見渡してみましょ。



コンクリートで固めない駐車スペース



街区を歩いていてまず気づいたのは、駐車スペースがコンクリートで固められていないことです。他の住宅街を歩いていると、コンクリートの打ち込みや、青目碎石の細かい砂利敷きの駐車スペース以外はほとんど見かけませんが、ここでは、赤茶色系の大きな碎石が敷かれ

ています。あまり見慣れない石なので、「おおっ！」と目をひきます。駐車スペース以外にも使われ、町並みに統一感を与えているこの石は、地元の採石場のものだとか。

碎石敷きでないところは、淡いグレーの平板が敷かれています。こちらは、コンクリート平板やインターロッキング・ブロックを裏返しにして、素朴な風合いを生み出しています。これらは街区のルールで定められています。車輪が乗らない部分は、大胆にノシバを使い、赤茶の碎石と緑のノシバの対比が、一見無骨なように見えて、荒々しく自然な印象につながっています。

ブロック塀・アルミフェンスとの決別



隣地との境界は、古い家では背の高いブロック塀。新しい家では、コンクリートブロックを2、3段積んで、その上にアルミフェンス。そんな印象がありますが、この街区にそれらは見当たりません。一部板塀も見られますが、基本的に隣地との境界は生垣です。生垣というと、これまた昔の屋敷を囲んだイヌツゲ、ツバキやイヌマキ、もしくは幹線道路の中央分離帯に延々と続くツツジなどを思い浮かべますが、この街区では「混植生垣」です。前号で紹介した20種類の自生種がミックスされ、構成されています。単一の植物による生垣よりも、多様で雑多なイメージが、町に活気を与えているように感じられるのは、緑の設計がしっかりととなされているからでしょう。緑が成長して、刈り込むような時期を迎えると、また違う表情の町になるのでしょうか。

ウッドデッキは標準装備!?



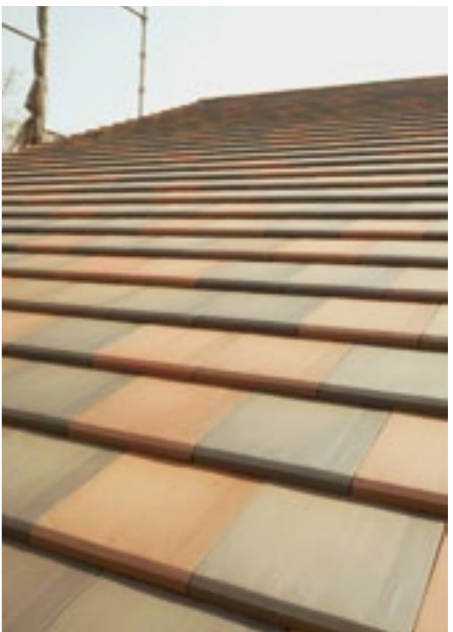
「必ずウッドデッキ、もしくは縁側を設けるように。」そんな規則があるのかと疑ってしまっただほど、ウッドデッキのある家が多いです。数えてみました。26軒中、実に20軒がウッドデッキ、もしくは縁側付きの家です。ウッドデッキがない家も、土間テラスや芝生テラスを備え、「室内からそのまま外へ出られる空間の必要性」が意識されているのだと感じました。一軒で複数のウッドデッキを持つ家もいくつか見られます。半分で半分外のようなこの空間が室内とうまくつながることにより、生活スペースがとても広く感じられます。

外壁にもあたたかみが

近頃の住宅は、外壁はサイディングが基本。それほど人気の高いサイディングですが、この街区ではほとんど目にするがありません。外壁は面積が大きいため、その建物を印象付ける最大の要素です。外壁の多くが塗り壁や板張りになっていることにより、この街区は周囲の街区とは異なった魅力を獲得したと言えるでしょう。



化粧スレート屋根は見当たらず



地上からだとあまり分かりませんが、いろいろなモデルハウスの2階の窓から他の建物を眺めた時、新築住宅で最もシェアが高いと思われるスレート屋根が「ない」ことに気づきました。ほとんどがガルバリウム鋼板で、和瓦、平板瓦、スパニッシュ瓦も見られます。建売の分譲地では決して見られない、新たな提案を持つ街区です。

シンプルでスマートな金属瓦に加え、窯変の美しい淡路瓦や、素材ないぶし瓦の屋根を持つ町並みを、上空から眺めてみたいものです。飛ぶ鳥たちの間で、話題になっているかもしれませんね。

土間を見直す里山の生活



「土間」というテーマが設定されているの？」そんな声が多数寄せられているようですが、広い土間を持つ家がたくさんあるのは、単に「偶然」のこと。里山の生活という想定がそうさせたのか、この町並みには広い土間が似つかわしかったのか。

普段の生活で狭い玄関にモノが溢れ、もっと土間があれば便利だと感じることはありませんが、玄関土間に始まり、ホール土間、土間リビング、土間ダイニング、土間キッチン、通り土間、土間テラス、瓦敷きの土間に、アルファベットのD O M A、外土間、内土間、ついには一階部分が全て土間。ドマドマ住宅博と改称したくなるような勢いですが、「土間のある住宅」のバリエーションを見に来るだけでも、この住宅博は有意義なのではないでしょうか。



この土間が便利なのかそうでないのか、実際に生活してみないことには、想像力だけでは補いきれない部分ではありますが、「子どもたち」「や「里山」と言ったフクターを考えた時、その生活の楽しさか思い浮かびます。

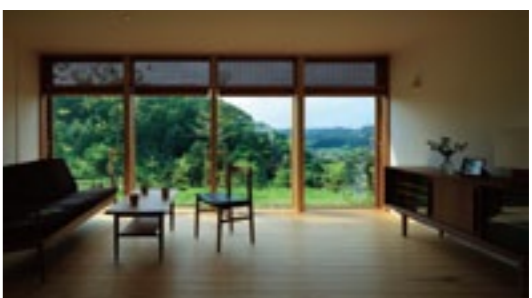
北に開く

全居室南向きの住宅が喜ばれる傾向にありますが、居室が全て南にあるということは、自然と、北側にはお風呂やトイレ、キッチン、納戸などが追いやられ、北立面図には小さな開口部が申し訳程度に

あるだけで、ほとんどが壁になります。ところが、この街区の

里山沿いの住宅は、北もしくは北西に、ドカンと抜けている建物が多く見受けられます。せっかくの景観を一杯活かすために、いわゆる「北側」という常識を拭い去ったのでしょうか。その結果、北側を閉じるよりも何十倍も魅力的な、そこでしか実現できない住宅が完成したようです。

現地足を運ばれた方は体感されたかと思いますが、自宅からこの里山の景観を楽しめるなんて、なんとも贅沢がすぎる話です。しかし、隣の街区に目を移すと、同じく里山に面した立地でありながら、北側を塞いでしまっているように見えるのは、目指す住宅の理想像が異なるということでしょうか。



太陽の光を有効に

大きな開口部を持つ住宅が多く、夏の暑い時期も窓を開け放つと風が通るな、と感じましたが、立冬を迎えたこの時期、夏よりも家の奥まで太陽光が差し込み、ホカホカと暖かく感じます。軒や庇により、太陽が高い位置にある夏の太陽光は遮り、低い位置にある冬の太陽の光はそのまま受け入れるという工夫があるそうです。さらに落葉樹を植えることにより、夏は茂った葉で光を遮り、冬は落葉するので光が届きます。夏には緑の中を通ってきた「緑風」は、乾いたコンクリート・ジャングルを吹き抜ける風よりも涼しいと言われています。



太陽光の利用として、屋根に発電パネルが搭載されている建物もいくつかあります。現在パネルが搭載されていなくても、ほとんどのモデルハウスでは簡単に搭載できる設計になっているそうです。

一方、2棟のヴァンガードハウスの屋根には、変わった形のパネルが載っています。パッシブソーラーとも言われる「空気集熱式ソーラー」です。屋根の上で太陽熱を集め、床下のコンクリートに蓄熱し、その輻射熱で室内が暖かくなる仕組みです。冬にはほっこりやさしい暖かさを味わうことができます。夏は、夜間の外の冷たい空気を室内に取り込みます。

太陽と風と大地を大切に暮らして見えてきました。

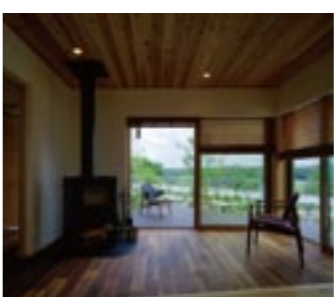
こんなところにエアコンが!?

室内を歩いていると、足元からふわりと風が……。のぞいてみると、床の格子の下で、エアコンが動いています。別のモデルハウスでは、エ

エアコンが半分床に埋められるようなところに設置しており、室内へではなく、床下へと風を吹き出しています。スキップフロアの下の納戸スペースにエアコンが付いている例もあります。

部屋割りできていない大空間の家が多いため、各部屋に1台ずつエアコンを設置するのではなく、建物内で1台、もしくは2台のエアコンを装備している住宅がほとんどです。冷房は2階の高い位置から吹き降ろして、暖房は一度床下を循環させて室内へ。そういう設計が多いのは、業界の流行りもあるのでしょうか。

暖房としては、薪ストーブを導入している建物も多く、煙突が立ち上がる外観も印象的です。暖かいだけでなく、「火を囲む団欒」というシチュエーションは、幾つかのモデルハウスで重視されています。囲炉裏のある家も見られました。



前述の空気集熱式ソーラーも含め「暖房」という観点だけでも、これだけ多くの実例を目にすることができるとこの街区は、まさに博覧会なのだと感じます。寒くなるこれからの時期、体感で評価できるのが楽しみです。

見えないところも博覧会

街区にある木のベンチに腰を下ろし、里山住宅博のパンフレット「里山Style Book」のページをめくっています。各建物の仕様表が掲載されており、目に見えない部分も様々な仕様で造られていることが分かります。いろいろな仕様の建物が一箇所で見られるというのは、博覧会ならではの、全国の建築関係者にとって、興味のある仕様の建物を体感できる、またとない機会です。



例えば工法・構法。同じ木造軸組でも、S E構法、NK工法、WB工法、エアパス工法……。断熱材は、高性能グラスウール、セルローズファイバー、硬質ウレタンフォーム、ビーズ法ポリスチレンフォーム、押出法ポリスチレンフォーム、フェノールフォーム、ポリウレタンフォーム、ポリエステル、インシュレーションファイバー……。サッシも、アルミサッシ、樹脂サッシ、木製サッシ、アルミ樹脂複合サッシ……。まさに、「仕様の宝石箱や」と、業界関係者の喜びの声が聞こえてきそうです。

こうして、他の住宅との差異を見ていくと、すべての項目が同じ流れに沿っていることに気づきます。カラフルで、きらびやかで、主張が強かったり奇をてらったり、そんな周囲と溶け込まないものを極力排除

した、シンプルで自然に溶け込む飾らない住宅を目指したのだということが、素人目にも見えてきました。

全体をポヤッと見て、「いい町並みだね。」と感じるよりも、部分に注目することにより全体のコンセプトが浮き彫りになり、より深い理解につながるのだという体験ができました。



(文：米村直樹)